本多秋五のことなど
――渡辺綱雄さんに聞く――

小倉　斉

はじめに

かねてよりお願いしていた本多秋五氏や故平野謙についての思い出話をお聞きするため、愛知教育大学の吉田正信氏（本学非常勤講師）とともに渡辺綱雄さんのお宅へ伺ったのは、一九九二年三月二十八日のことであった。前年十二月に胃癌の手術を受けられ、入院中のところへお見舞いに伺った折と比べると、ずいぶんお顔の色もよく、お話をお聞きした一時間ほどの間も張りのある力強いお声に接することができた。もう少し暖かくなってから再びお伺いする約束をしてお宅を後にしたが、道すがら、本多秋五氏のことやご自身の文学体験などを愉快そうに語られた渡辺さんの姿を思い、心地よい興奮を覚えるとともに、その快復を確信していた。

それから一ヶ月後の四月二十九日夜、奥様からお電話で、渡辺さんの訃を知らされた。にわかには信じられなかった。もっと色々お尋ねしておきたかった、などと勝手なことを思った。

渡辺さんは、早稲田大学を卒業後、名古屋新聞に入社、のちに朝日新聞東京本社に転じ、『婦人朝日』や『週刊朝日』の編集部などを経て、戦後は朝日新聞名古屋本社に停年まで勤め、そのあと瑞穂短期大学や愛知淑徳短期大学国文学科で教鞭を取られた。愛知県立第五中学校（のちの熱田中学校）時代からの友本多秋五をはじめ、藤枝静男、故平野謙らとの交友があり、あるいは文化部記者として昭和の文壇の動きを間近で見てこられた。渡辺さんの訃に接し、また一人昭和文学の生き証人を喪った、との思いが強い。

今回ここに紹介するのは、三月二十八日の訪問時にお聞きした文学的回想の記録である。渡辺綱雄さんへの哀悼の意を込めて、本誌に掲載する。タイトルは、本多秋五氏との交友を中心とした内容のため、便宜的に付けさせていただいた。

――本多君と知り合いになったのはねえ、彼が中学の下級生として入学した頃なんですよ。これは本多君が淑徳短大に来て話もしましたがねえ、その時にね、自分が中学に入学した頃には渡辺君の方がうんと文学の方は進んでおった、自分はその当時『少年倶楽部』を読んでおったが、その時分には渡辺君は『新潮』とか『改造』とか『中央公論』なんかの小説

を読んでおった、という枕詞で話をしだしましてね。

その時分はご承知の通り〈現実派〉と言うんですかね、菊池寛とか芥川龍之介とか久米正雄なんかがひとつの王城を築きましてね。なるほど今から思い返してみても、菊池寛の「恩讐の彼方に」（『中央公論』一九一九・一）とかね、それから「藤十郎の恋」（『大阪毎日新聞』一九一九・四・三～一三）とか久米正雄の「受験生の手記」（『黒潮』一九一八・三）とか、芥川龍之介は「鼻」（第四次『新思潮』一九一六・一）とか「羅生門」（『帝国文学』一九一五・一一）なんかをかじりましたのでねえ、そっちの方の現実的な傾向のものを読んでいたわけなんです。

で、本多君は、身近にねえ、文学好きがいたことがきっかけなんですよ。すぐと上に本多ヨシオ君、義雄と書くんだが、一年上の兄さんがいて、戦死されましたけれどもねえ、義雄君は、高等商業へ行かれたから、別に文学青年というわけじゃあないが、それでも文学の本をずいぶん読んでいたし、姉さんが藤村の詩集なんかを読んでおられた。そんな関係で、やっぱり身近なところから現実的にね、彼は文学的なものに引き寄せられていったという点、多分にあるんですわ。

ところが、わたくしはね、なんというのか、浮気というのか、好奇心が強いというのか、野次馬根性というのか、新しい文学の傾向があればついついそっちの方へ引かれていってしまうんです。その当時、宗教文学なんかが流行りましてねえ。江原小弥太の『新約』（越山堂書店、全三巻、一九二一・四～五）とか倉田百三の「出家とその弟子」（『生命の川』一九一六・一一～一九一七・三、第四幕第一場まで掲載。岩波書店、一九一七・六）とかね、それから賀川豊彦の「死線を越えて」（『改造』一九二〇・一～五、二十二章まで掲載。改造社、一九二〇・一〇）。そういう小説あるいは戯曲なんかに引かれたりもしました。まあその当時、漱石の「草枕」（『新小説』一九〇六・九）や蘆花の『思出の記』（民友社、一九〇一・五）とか、そういうものは教科書なんかで一応卒業したというようなつもりになっていて、忘れてね、飛んでいってしまったわけなんですわ。ところが、本多君は、ガッチリ、その点堅実に読んでたんですね。とくに、ぼくが早稲田の時分、本多君の東大の時分には、もうだいぶ開きができておりました。ぼくたちは、もっぱら『文芸時代』を読みましたから。横光利一や川端康成、それから、いろいろありますねえ、下手なところでは酒井真人とか南幸夫、鈴木彦次郎なんていうのが書いてました。だが、彼は堅実にね、その時分に円タクなんかに乗っておってもねえ、チェルヌイシェフスキーの創作を読んでたり、それから『戦争と平和』をずーっと読んでるんですよ。非常に堅実。彼も左翼では、相当のところへ行っておりましたけれどもねえ。わたくし自身も、いわゆるまあ、左翼のまるで一兵卒のようにいろんなところを走り回らされた。その走り回らされ方がねえ、本多君の堅実

な、いわゆるマルクス＝レーニン主義の研究の仕方とは全然違っているものなんですねえ。新しいもの見たさに、わたくしなんかはやっておったんだけれども、彼はやはりそうじゃなくて、そのひとつの信念とイデーをもってぶつかっておったんですよ。その点、ぼくなんかとは全然違うんですねえ。夜遅くまで起きておって、着実に勉強する。感心しましたねえ。

近代文学同人（荒正人・小田切秀雄・佐々木基一・埴谷雄高・平野謙・本多秋五・山室静）編の『続戦後文学の批判と確認　近代文学の軌跡』（豊島書房、一九六八・六）は、雑誌『近代文学』に載った座談会の記録であるが、その中の本多秋五についての座談会を見ると、本多秋五の中学時代の友だちとして渡辺綱雄の名前がしばしば出てくる。例えば、平野謙が〈あの時分から白樺派は非常に好きだったのかな〉というふうに本多秋五の第八高等学校時代のことを言うと、それに対して藤枝静男が〈いやそんなことはなかったと思うね。と言うのは、中学のころのことは渡辺綱雄さんなどに聞かなければ本当のことはわからないのだけれど、ぼくが知り合いになってしばらくしたころ『朱雀』という……〉というふうに話がちょっと出て来る。それから、大岡昇平が〈高等学校のときの読書の傾向はそうとして、中学のときはどうだったですか〉と聞くと、平野謙が〈それはよく知らないが、中学時代の友だちで渡辺綱雄君というのがいて、文学青年で早稲田にいたが、卒業後は朝日にはいった。ずっと朝日の名古屋支社にいたはずだと思うが、その渡辺綱雄君と仲がよくて、ぼくも本多を通して渡辺君とも知り合いになって、彼らは東京では同じ下宿にいたこともあったが、渡辺君たちと中学時代に同人雑誌をやっていたくらいだから、中学時代から文学は好きだったのですね〉というふうな発言もある。ちなみに、本多秋五の愛知県立第五中学校入学は一九二一（大正十）年四月のことである。

本多秋五の兄義雄は、名古屋高商を卒業後、同郷の森家に養子に行き、結婚し、尾三自動車会社に入り、のち独立して岡崎で自動車の部品販売兼修理工場を開設したが、兵隊に都合三度とられ、一九四四（昭和十九）年六月、サイパンに行く途中、戦死した。この兄については、本多自身が「戦死した兄のこと」や「サイパンの旅」（『古い記憶の井戸』武蔵野書房、一九八二・五）で詳しく描いている。〈敬礼をやかましくいうようなこと、すべて権柄ずくなことに兄は反感を感じるタチだった。人と争うことが性にあわなかった。そして、人に気兼ねする性質でもあった。（中略）酷いことはみていられない、というタチでもあった。汚いこと、曲がったことが嫌いと

いう、この物理的から道徳的にまでいたる潔癖もまた特色的だった〉と描かれる義雄は、秋五にとって理想の大衆像であったとも言えよう。〈兄は戦争むきの人間でなかった。こういう人はたくさんいる。そういう人の多くが戦争で死んだ〉に込められた思いは深い。

――本多君の堅実さに比べ、わたくしなんか率先して、中学坊主のくせに雑誌をやってた。いわゆる『朱雀』ですねえ。ご覧になりました、『朱雀』は。当時流行った同人雑誌の傾向を見習って、アンカットでやろうということになったんですよ。中学五年生の時には、本多君と一緒にクラスから雑誌部の委員になりましてね。校友会雑誌『瑞穂』の編集を任されていました。五中というのは、現在の瑞陵高校ですね。

ところで、わたくしなんかが書いたものは浮わついたもんだけれども、本多君の書いたのは、『古い記憶の井戸』の中にも収められていますが、なかなか、現実に即した、しっかりしたものなんですねえ。いやあ、よく勉強したですよ、彼は。「暁闇を凝視する」というのも本多君。こんな硬い小説を書きやがってなんて言って冷やかしていたんだけれども、しっかりしたものです。

そんな頃ですかねえ。とにかく、トルストイは、かたっぱしから読んでましたねえ。よくあんなバスやタクシーの中で読めるなと思うくらい読んでましたねえ。それで、ひとつのものに集中するんですよ。わたくしのように、あっちへふらふら、こっちへふらふら、なんてことがない。わたくしなんか、そのうちに小説でも書いてみようというような気持ちになっておりましたがねえ。とにかく本多君は、もう既に十代の後半からトルストイは読んでおったんですよ。

渡辺さんに見せていただいた『朱雀』創刊号（一九二五・一〇）は、アンカット版で、下は切らないままで保存されていた。旧制とは言うものの、中学生の仲間でこうした雑誌が出されていたことは驚きであった。

新感覚派とプロレタリア文学の尖鋭化を生み出した大正末期の新文学への根強い要求と文学熱の気運が、空前の同人雑誌時代をもたらしたことは、いまさら言うまでもない。一九二四（大正十三）年に誕生した『文芸戦線』や『文芸時代』をはじめとして、一九二五、六（大正十四、五）年に発刊された主要な同人雑誌は、『文芸日本』、『不同調』、『解放』（復刊）、『文芸市場』、『青空』、『原始』、第九次『新思潮』、『朝』、『辻馬車』、『主潮』、『真昼』、『文党』、『虚無思想研究』、『芸術運動』、『朱門』など、枚挙にいとまがない。こうした状況に触れながら高見順は、『朱雀』についても、〈本多秋五が渡辺綱雄等と名古屋でやっていた同人雑誌である〉（『昭和文学盛衰史』文芸春秋新社、一九五八・三）と紹介している。『朱雀』も

また、確実に、大正末期の新文学への情熱に支えられた雑誌であった。

『朱雀』は一九二七（昭和二）年十月の第八号まで続き、本多は第二号から同人に加わっている。当時の同人は、今井銀次郎、小川安政、渡辺津南夫（綱雄）、渡辺鈴彦、古川辰三郎、下郷羊雄である。渡辺綱雄さんの『萌黄日記』（中部日本教育文化会、一九八四・九）所収「ある文学少年の日記」によれば、『朱雀』は〈東京、大阪の同人雑誌に伍して〉発行され、〈同人のほとんどは旧制高校受験前の五年生で、皆がみな文学部志向の者とは限らなかった。重大な人生の岐路に立つ卒業を控えた五年生が同人雑誌を出す無暴さは、現在では一寸考えられないことであろう〉と記されている。

『古い記憶の井戸』の「第一部　初期習作」には、本多秋五が『朱雀』に発表した作品として、「言葉の価値その他」（創刊号、一九二五・一〇）、「新居雑話」（第二号、一九二六・一）、「埋め草にでも」（第三号、一九二六・二）、「郷愁」（第三巻第一号、一九二七・一）、「夜の日記」（第三巻第三号、一九二七・七）、「暁闇の光景」（原題「暁闇を凝視する」、第三巻第四号、一九二七・一〇）が収録されている。

――当時、第八高等学校から、わたくしどもの『朱雀』とほとんど平行的に、『ハクヨウ』という文学雑誌を出しておりました。ポプラです。白い『白楊』。わたくしもちょっと書いておりますが、その後ろのところに、校長の大塚末雄（？）さんを留任させるためにストライキをやったことがあるんですが、そのストライキに対する本多君の述懐が出ています。雑誌部員本多秋五の「大塚校長を送る」という文章。〈それにつけても、我々が途方もない不孝者であったことをもって悲しくも寂しく感ぜざるを得ません。運動に、学問に、日常のひとつひとつのことが先生のご心配を煩わしたことは勿論として、とくに彼の盟休事件については、非常の憂慮を煩わし、この我らの敬愛おかぬ老校長をして「わしは教え子に背かれた。身が痩せる思いがする」と嘆ぜしめたことを思うとなんとお詫びしてよいのやら。ただ我々の罪深さ、無思慮と軽率とを深く恥ずるばかりであります〉というふうに書いてあります。とにかく、晩（？）僧房へ立てこもって抵抗したわけですから、お寺でねえ。

国文学科開設二十周年記念の特別号として出された『淑徳国文』（第二十六号、一九八四・二一・二五）の「『麺麭』と北川冬彦」の中に書いた通り、わたくし自身は小説でも書こうというので、かなり放埒な生活をしておりました。本多君も若干誘いましたよ。堅いからそんなことはないだろうと思われるかも知れないが、彼も適量に青春の鬱憤をはらした。わたくしが書きました『私版　名古屋の映画』（作家社、一九

五一・?）の中で本多君が序文を書いてくれてましてねえ。早くから渡辺君は早熟で、映画に誘ってくれたり、もっと悪いところへ誘ってくれたりした、という前書きの文章もあるくらいですから。

「『麺麭』と北川冬彦」によれば、渡辺さんは、当時荒木信五のペンネームで「野上弥生子伝」などを寄稿していた故平野謙の推薦で『麺麭』同人となり、一九三三（昭和八）年十二月の小説「一族」発表を皮切りに、以後最終刊までに、五、六篇の小説（「暗い家の話」「仏師」「当世書生気質」「これでいいのかしら」など）と数篇の随筆を書いておられる。「一族」が掲載された『麺麭』第二巻第十一号の編集後記には、神保光太郎によって〈渡辺津奈夫は新しく加つた人。その長編作家的素質、その文体の問題等は読者に興味深い示唆を投げ出すと思ふ〉と紹介されている。

「『麺麭』と北川冬彦」には、渡辺さんが「一族」を書かれた一九三三（昭和八）年十月の日記の一節が収録されているが、当時の〈インテリルンペン（文学青年）〉の生活ぶりを垣間見ることができ、興味深い。一部を紹介する。〈正午ごろ、新宿にでて、オリエント、三越、中村屋、紀ノ国屋（ママ）――本多秋五君から金を借り、アルフォンス・ドオデ「プチ・ショウズ」を求む。午後も「一族」浄書〉（十月十六日）。〈「辨証法読本」読了。斎木来る。本多と三人で新宿を散歩。帰って夏服を持って早稲田の〝島津〟へ質入れ、十二円貸してくれる。再び新宿へ、樽平でまず一杯。続いて浅草田原町の騎西屋へ。騎西屋は馴染みの酒店。むろん酒〉（十月十八日）。〈紺がすりの併せ（ママ）を持って斎木の下宿へ行き、島津へまた質入れ。金が出来たので二人で武蔵野館へ行く。アメリカ映画「グランドホテル」とオーストリア映画・ポルファリー監督「モナ・リザの失跡」両映画とも秋の豪華版〉（十月二十日）。〈平野謙君（自分より一足早く『麺麭』同人となっていて、私にしきりに同人に入れとの勧誘するのであったが、私の優柔不断のため一日延ばしに返事を延ばしていた）へ、小説「一族」が書けたので一応読んでほしい、その上で推薦に足ると思うなら、北川、堀場面氏に通達してほしい、との旨を添え原稿を送る〉（十月二十一日）。

『私版　名古屋の映画』に寄せられた本多秋五の序文は、「渡辺綱雄のこと」と題され、渡辺さんが一年休学されてクラスが同じになったこと、試験の時カンニングの共犯になったりしたこと、よく映画に誘われたこと、下宿が同じであった時期の思い出などが記されている。

――本多君と下宿が同じであった時期というのは一回だけで

はないんです。最初は、いま厚生年金会館になっている新宿の番衆町というところ、あの花園神社の近くで、一緒にかなり長くおりました。それから、西大久保へ一緒に移りました。西大久保で彼は検挙されましたがねえ、その下宿でも隣の部屋でした。

『古い記憶の井戸』所収の年譜によると、一九三一（昭和六）年の項に、〈一月、下落合の杉本という素人下宿に移る。『朱雀』の仲間であった渡辺綱雄（早稲田大学文科在学中）がいたからである〉とあり、同じく一九三一年の項に、〈夏休み帰省中に、東京の下宿先の杉本家が下宿人（本多と渡辺の二人のみ）の荷物を持って四谷区番衆町に移転したため、九月に上京してからはここに住む〉とある。さらに、一九三三（昭和八）年の項に、〈一一月二三日の新嘗祭の日、西大久保の下宿（番衆町の下宿・杉本家が再移転したもの）で検挙され、大塚署に留置される。なお、隣室の渡辺綱雄は帰省中で検挙を免れる〉と書いてあり、二人の下宿が同じであった時期はおよそ三年間であったことがわかる。

――早稲田にはねえ、百姓休みといって、秋に試験休みがあったんですよ。今は、ないでしょうけれども。昔で言えば、農繁期です。そんなわけで、本多君が検挙された時は、わたくしはこちらに帰っておって無事だった。普通だったら本も没収されるけれども、こちらに持って帰っていたから、大丈夫でした。あそこに置いてあっても、ろくな本じゃないから持っていかなかったですよ。「隣の奴も同じ様な傾向らしいな。ひっぱってやろうか」って言ってたぞって、後で本多君から聞かされましたがね。

その時分はねえ、いわゆる救援隊を寄せ付けなかったですから、本多君が検挙されてから見舞いなんかに行くこともできず、こちらから連絡の取りようがなかったですねえ。そりゃもう、ずいぶん心配しました。下宿の杉本さんというお婆あさんも心配して手紙をくれました。一週間ぐらい休みがあって、こちらに帰って来てしまっていたものだから。

本多君が検挙されたのは一回だけです。彼は、連絡をねえ、スリの少年に託してよこすんです。房中の連中は汚くて仕様がないと言っておりましたがねえ、スリの少年なんてのは気が利いててね、情義を重んじてくれるからなあなんて言って。その方が清潔なんだそうで、側で寝るようにしておったということです。

一九三四（昭和九）年四月一日、起訴保留で釈放された本多秋五は、身柄引受人として上京した長兄鋼治とともに郷里である愛知県西加茂郡猿投村花本（現在豊田市花本町）に帰り、翌年の暮れまで監視されながら生活す

ることになる。『古い記憶の井戸』所収年譜の一九三四（昭和九）年の項には、〈花本蟄居時代には、名古屋の実家に帰っていた渡辺綱雄、おなじく伊勢の富洲原町（現在、四日市市）の生家に帰っていた泉充その他と、渡辺の家で文学についての研究会をやっていた〉とある。

――文学についての研究会は裏の離れでやっておりましたがね。新しい傾向の、当時の文壇の文学なんかもやっておりました。卒業論文「森鷗外研究」が不本意なものであったために、前年（一九三三年）の十一月に新しく「森鷗外論」を書き上げておりましたが、森鷗外のことではあまり話はしなかったなあ。かなり新しい翻訳物なんかを話しました。どんな本だったかはちょっと思い出せないけれども、芸術派系の文学なんです。

その時分には、本多君の矢作の花本の家なんか訪れましてねえ。そして、勘八峡とか香嵐渓へ行って、紅葉を見ながら、河原で茶を飲んだり、ビールを飲んだりしました。鵜の土産を貰って帰りました。今は禁猟だが、その時分はまだ売ってましたからねえ。家人には非常に喜ばれました。

本多君の卒業論文についてはですねえ、森鷗外の翻訳も、評論や難しい理論的な部分についても、平野謙君がかなり代筆しましたがねえ。小説についてのところは、わたくしも少し、代筆してあげたりしました。彼が書きとばした、彼独特のねえ、癖のある文字を写すんです。しっかりしているけれども、何かこう、彼の字には癖があるんですよ。中学時代から教師がねえ、本多の原稿は読みにくいなあなんて言ったりしてましたがねえ。それで、平野謙君が、本当に、かなり貢献してました。わたくしの方は小説ですからねえ、だから、非常に楽でした。それは、ある程度下書きがあるわけで、それを清書するということなんです。だから、手直しはしない。ほとんど、しなかったな。

渡辺さんの家で文学の研究会が行われていた一九三四（昭和九）年という時点で、中国への侵略など始まっていた時代に対する危機感とでもいうものを本多秋五がどの程度持っていたのか、興味深い点であるが、そのあたりの話はあまり聞けなかった。当時渡辺さんは、中日新聞の前身である名古屋新聞の記者をしておられたそうだ（約五年間）。本多秋五の郷里花本での監視生活は、一九三五（昭和十）年の暮れまで続くが、この間、高瀬太郎名で「森鷗外論」（『文化集団』一九三四・七～八）を、北川静雄名で「奉天一巡記」（『文化集団』一九三四・一一）や「レーニンのトルストイ評について」（『文学評論』一九三五・二）を発表している。

一九三六（昭和十一）年一月、再び上京した本多は、兄の友人たちの世話で逓信省電務局無線課に就職した

が、〈好きなことと喰うこととは、一致してくれなかった〉（「私の人生観」―『電信電話』一九五六・二、後『古い記憶の井戸』に収録）。一九三八（昭和十三）年の秋には東京都市逓信局に転出、放送考査官としてラジオ検閲の仕事に従事するが、〈一日の業を終えて家へ帰る時、今日一日何をしたか、今後何をする当てがあるのかと考え〉〈家へ帰っては、本来の「自分の仕事」をするだけの元気が残されていない〉〈どこをみまわしても本当の自分がみつからない〉（「私の人生観」）という状態であった。〈役人で老いたのでは死に切れない〉〈役所では自分の生命が生かされない〉（「私の人生観」）と考えた本多は、一九四一（昭和十六）年一月、役所をやめた。退職後、背水の陣をしいてトルストイに取り組み、書かれたのが「『戦争と平和』論」（一九四三年十月脱稿）である。一九四四（昭和十九）年十月には「『戦争と平和』論」のタイプが完成するが、たとえ発表できたとしても十年後のことと覚悟し、死んだ後はせめて子供と原稿だけは残っていてほしいという思い、いわば遺書として書いたという思いを込めてタイプに打たせたという。B29の東京初来襲は、タイプ完成後十数日のことであった。

――わたくしは、戦時中軍隊で、パレンバンへ行きました。その時の著書が一冊あります。『パレンバンへの道』（新太陽社、一九四四・一二・一五）。新太陽社というのは、もと『モダン日本』という雑誌を出しておりました。それが、『モダン日本』ではいかんというので、新太陽社としたわけです。阿部知二さんが紹介してくれまして、序文も書いてくれました。阿部さんは八高出身。そんなことで、『週刊朝日』や『婦人朝日』に原稿をよく頼みましたものですから。小説なんかもよく書いてもらいました。中の写真は、わたくしが撮ったものです。

この時代の本ですと、戦時色が濃いというので、戦後にはつぶされたりしたものが多いんだけれども、この本は没収されなかった。かなり、全国的にばらまかれたものですから、高知支局におる友達が、「お前の本、高知の書店で買って持ってるぞ」と言ってましたがねえ。

パレンバンへ行く前から、何か記録を残そうというつもりはありました。この前にねえ、パレンバン、スマトラの前に、マレーへ行ってる。これは、全然本にしなかったですけれども、ノートだけ三冊、まだ今でも残っております。まあ、「マレー紀行」というような文章ですねえ。

この頃は、日本軍としては大変な時期でした。マレー半島には、敵軍がね、上陸する一歩前だったわけですから。よく無事で帰って来ましたよ。しかも、飛行機でね。まあ、もっとも、船で行ったら、あるいは、無事で帰れなかったかも知れんけれども。

そんなわけで、太平洋戦争に入ってからは、本多君とはほとんど会えなかったですねえ。戦後になって、雑誌『近代文学』が出てから、連絡を取り合ったわけです。で、面白いのは、『果実』（一九四七・八？）にわたくしが「富士見」という戯曲とも作品ともつかぬものを書いていますけれども、これは、原稿があったら送れと本多君が言ってきたものですから、送りましたら、送り返されて来たんですよ。どうも、『近代文学』とはそぐわぬ、ということで、没になった。まだまだ、ほんとに甘いもので、これは没になるでしょう。

本多秋五は、一九四五（昭和二十）年五月、妻子を連れて郷里花本に疎開した夜、召集令状を受け取る。陸軍二等兵として終戦まで三ヶ月浜名湖畔で軍隊生活を送った。

雑誌『果実』は、なかなか立派な雑誌であった。渡辺さんのお話では、三、四冊出たという。『古い記憶の井戸』には、『果実』第二号（一九四七・一〇）掲載の「『戦争と平和』ノート」が収録されている。

――それから、当時の文学界の情勢を知る上で貴重な本があるんですけどねえ。『柴田陶夫集』（編集兼発行者久米富美夫、一九二九・五・一）。柴田陶夫（しばた・すえお）は、三高文科甲類から東大の独文科へ行って、東大に在学中に亡くなったんですわ。三高の学生ですがね、実に日記がねえ、うまくてね。『文芸時代』について書いた、その当時の文章がねえ。武田麟太郎が〈青年が青年の死を聞くことは悲しい〉という序文を書いておりますが、これは当時よく読まれました。真下信一さんなんか、こういうものを持っているかねえなんて言って、『文芸時代』を批評したものなんか面白いと。私家版で出た本だが、真下さんなんかも、貴重だから持ってろよと言ってました。柴田陶夫については、ほとんど取り上げられてないけれども、もっと取り上げるべき人物だと思いますねえ。

これは、同じ三高でねえ、川口君というのが、これを発行するために寄付したらしいんです。それで、何冊か貰ったものですから、これいい本だから読めよってくれたんです。川口君というのは、その後早稲田へ入りましてねえ。同級生でした。

『柴田陶夫集』の編集兼発行者は、〈伏見市字帯刀百拾番地、久米富美夫〉となっており、柴田からの手紙をおもに貰っている人物のようだ。明治末から大正期にかけて、その死が青年たちに大きな衝撃を与えた存在として、藤村操（一八八六～一九〇三）、魚住折蘆（一八八三～一九一〇）、山本飼山（一八九〇～一九一三）らが有名だが、柴田陶夫もそれに近い存在だったのかも知れない。

『文芸時代』を批評した文章としては、久米宛の手紙の中で〈いや、いずれも傑作として推賞する値打あり〉と書いて〈川端、佐佐木茂索、今、十一谷最も良く〉云々。最後に〈傑作を書くべし。勉強すべし。余を訪問すべし。一緒に参加すべし〉とある。

真下信一は三高、京大を卒業後、八高、名古屋大学の教官、多摩美大の学長を勤めた。

――最後に、北川静男君や平野謙君のことを少し。北川さんには会ったことはありませんが、本多君の話にはしょっちゅう出て来ましてねえ。ちょうど、今の、名古屋城の近くの、ホテルナゴヤキャッスルの辺りにあった大きな病院の息子でした。やはり、八高の学生で、本多君とは非常に仲良くしておったんだけれども、若くして亡くなりました。東大を卒業せん前に亡くなったんじゃないかなあ。で、北川静雄の名前で本多君が書いたことがあります。

平野君とは、本多君の所へよく来たのと一緒になって、下宿で小説の話なんかをしました。そういう時なんか、実家がお寺だっていうことなんかは全然話しませんでした。ごく最近のことですよ、知ったのは。お寺の話はしないで、彼はなかなか粋な歌を歌っていました。藤枝静男君の『寓目愚談』（講談社、一九七二・九）に出ているようなもので、歌はうまいし、美男子だしねえ。そういう話は、また日を改めてということにしておきましょう。

『続戦後文学の批判と確認　近代文学の軌跡』には、〈北川静男という男がいて、高等学校の卒業前にチフスで死んだ。藤枝君や僕なども手伝って遺稿集を出したが、この男が典型的な白樺派でした。名古屋の厚生館という大きな病院の末っ子で、親父が森鷗外の友だちで、伝説によると『雁』の主人公とかなんとかで……〉という平野謙の発言がある。北川の死は、一九三〇（昭和五）年二月のこと。この年十二月には、『北川静男追悼文集　光真美』が刊行され、本多秋五は「北川君の追憶のために――願わくばその人の追憶人々の心に残りて永く失われざらんことを」という一文を寄せた。本多が一九三四（昭和九）年から一九三七（昭和十二）年にかけて書いた随筆や論文に用いた筆名は、北川にちなんで「静男」を「静雄」に変えたもの。藤枝静男（本名勝見次郎）も同様である。

藤枝静男の「青春愚談」（『寓目愚談』）には、故平野謙の美男・美声ぶりについて次のように述べられている。〈寮の窓から飛び降りて、境界の土堤を乗り越えたところに菓子屋があって、夜になると時々皆で菓子を食いに行った。そこのお内儀さんは、平野が美しいのでチヤホヤして癪にさわったが、それは別として、店に闘球

盤という簡単な球弾きみたいな遊び道具があってみんなでやってみると、これも彼が断然強かった。流行歌もすぐ憶えるたちで、上手に口ずさんで見せる方だった。〈中略〉平野は、酒は飲めないけれど猪口一杯くらいやると機嫌が好くなって、この頃でもいい咽喉を聞かせることがある。入寮したてのころ、部屋のコンパを街の鳥屋でやって、二階で禁制の酒を飲んでいたとき、彼が大声で寮歌を歌ったら、隣で飲んでいた応援団委員の三年生が襖をあけて入ってきて、「いま歌ってた人の声は応援団向きだから是非入ってくれ」と云ったことがあった〉。

おわりに

日を改めてお話を伺うという約束は果たせぬままになってしまった。それにしても、渡辺さんの言葉のはしばしから伝わって来る本多秋五氏への熱い思いは、共に文学を志し、同時代を生き抜いた者としての深い友情に支えられ、感動的であった。眼を輝かせながら、〈本多君の著書は、全部あります。特に『物語戦後文学史』なんかは、一冊にまとめて、革表紙でね、八冊作ったうちの一冊だと言ってくれましたがね、今でもこれは持っております〉と語られた渡辺さんの声を忘れることは出来ない。そして、五月一日、ご自宅隣の長栄寺〈名古屋市中区橘〉で行われた告別式における本多秋五氏の弔辞の中の次の言葉も、同じく忘れることは出来ない。〈平野謙の死によって片身を削がれた魚の思いを味わった僕は、今また、渡辺綱雄の死によって、残った片身の半分を奪われた気がしている〉。

（おぐら・ひとし／助教授）